3．新潟県集中豪雨・中越地震その後　第１回（婦防リーダーマニュアル作成委員　全国地婦連　浅野幸子）

新潟県見附市で女性防火クラブが誕生しました ～７・１３豪雨水害を乗り越えた母親たちの手で

見附市・太田町女性防火クラブ（さくらクラブ）

■子育て中の働くママたちが女性防火クラブを設立！

１１月２０日（日）、見附市太田町において太田町女性防火クラブが、見附市消防本部・(財)日本防火協会による救急講習会を受けました。

見附市は、２００４年７月１３日に豪雨災害に見舞われており、市の中心部を流れる刈谷田川と稚児清水川で越水や破堤が起こって濁流があふれ出し、テレビや新聞を通じて市街地が広範にわたって水につかる被害を受けた様子が映し出されことからも、まだわたしたちの記憶に大変新しいところです。

そんな見附市の中でも、稚児清水川が刈谷田川に流れ込むあたりに近い太田町でこのたび、新たに女性防火クラブが設立されました。それがこの太田町女性防火クラブ、通称・「さくらクラブ」です。

見附消防本部による実演

自分達の命・くらしは自分達で守る。
真剣な面差しのクラブ員のみなさん

昨年の豪雨では、メンバーのほとんどが、お子さんを学校や保育園へ送り出しつつ、自分も中心市街地や近隣市へ出勤してしまったすぐ後に、越水・破堤によって地区全体が水没してしまいました。お子さん達の様子がどうなのか心配がたいへん募ったのですが、道路が水につかってなかなか自宅に帰れず、とても苦労したそうです。さらに、１０月２３日に発生した中越地震にも遭い、災害の恐ろしさを身をもって経験しています。

そんな子育てにも仕事にも奮闘している若いママたちが中心となってのクラブ設立です。

■さっそく普通救命講習に挑戦

講習会の開催場所は地区内の上北谷地域開発センターで、あいにくの雨模様にもかかわらず朝９：００にクラブ員たちは集合。この日は子ども達のスポーツイベントが会場のすぐ隣であり、子どもの送り時間に合わせて設定したのです。

最初に見附消防本部の石黒予防課長があいさつし、今回のクラブ設立にあたっては、昨年の水害時に日本防火協会が、全国の婦人防火クラブ員が中心となって集めた募金をもってきてくれたことが大きなきっかけでもあったことがあらためて紹介されました。また今回の女性防火クラブ設立を機に、さらに会員を広げ、他の地区にも女性防火クラブができればとの、期待のメッセージが贈られました。次に(財)日本防火協会からもあいさつをしました。

そして早速、見附消防本部の指導により講習開始です。
最初は止血法です。三角巾を手にとって、クラブ員は二人一組で講師の説明をうけながら直接圧迫止血法を実践。また止血帯の巻き方も学びました。

次に心肺蘇生法です。救急車が現場に到着する全国の平均時間は６分、一方で人間の脳は４分間血

液が送られないと細胞が死に始めてしまい、死んだ脳細胞は二度ともとには戻らないということをしっかり胸に刻んだのち、気道確保・人工呼吸・心臓マッサージと、３つの構成要素を学び、その後訓練用の人体モデルを使用して実際に練習を行いました。

　そして最後は、まだあまり一般に知識が普及していないＡＥＤ（自動体外式除細動器）の使用方法についても、最新の講習用キッドを用いて説明を受けました。

※日本防火協会の提供資材一覧

心肺蘇生法教育人体モデル（ＪＡＭＹⅣ ＲＥＣＯ）	１式
ＡＥＤ（自動体外式除細動器）トレーナー	一式
気道確保指導モデル気道確保原理の可動パネル	１式（５枚組み）
三角巾（105＊105＊150cm）	１１５個
清浄綿	２００枚

心肺蘇生法教育人体モデルとＡＥＤトレーナー

ＡＥＤトレーナー（拡大）

▲このページの上に戻る

●新潟県見附市消防本部からのリポートです

『女性防火クラブ員救急講習会』を開催

新潟県見附市消防本部　石黒予防課長

　（財）日本防火協会から交付を受けたＡＥＤ（自動体外式除細動器）トレーナー等の救急講習資器材を活用して、『女性防火クラブ員救急講習会』を実施しました。

　１回目は11月20日（日）、上北谷地域開発センターにおいて開催しました。参加者は24名と少人数でしたが、今年６月に当市で初めて結成された太田町女性防火クラブ員を主体とし、クラブ員以外に地域の女性の皆さんからも参加していただきました。講習会では、ほとんどの皆さんが学校等で開催された救急講習を受講されていましたが、ＡＥＤの取り扱いは初めてのため関心が高く、真剣に心肺蘇生法に取り組んでいました。

また、当日は、日本防火協会から塩谷様と浅野様が来市され、講習を見学された後、クラブ員や町内役員を対象に、昨年、当市を襲った７．13新潟豪雨災害時のヒアリングと被災箇所の視察を行われました。

２回目は12月３日（土）、ネーブルみつけを会場に45名の参加で開催しました。この会場には親子で受講されるなど若い女性の参加が多く、当日は、今年初の降雪が観測され寒さの厳しい日でしたが、皆さんの熱心な心肺蘇生法の練習は、寒さを吹き飛ばす熱気で、活気ある講習となりました。

当市では、太田町の防火クラブ結成以来、次の結成が足踏み状態となっていますが、今回の救急講習を受講された皆さんからは、女性防火クラブについての理解を得られたことから、今後の女性防火クラブ新結成に向けて弾みがつくことを望んでいます。

ネーブルみつけでの講習の様子

■水害であのとき町は？

１１３世帯・約４００人の住民が暮らし、小学校・中学校にあわせて３～４０人ほどが通う太田地区。

この日は、被災前後のなまなましい地域の様子を、現在太田町の地区長で、水害時は副地区長として危険箇所の見回りや連絡・調整、救援活動に携わった斉藤さんにもお聞きすることができました。

昨年７月１３日の当日は朝８：００ごろ、その少し前から危険を感じて川の水位など見回りにでていた地区長からの電話ですぐに役員全員が参集しましたが、異常な豪雨によって周辺の山からも水が流れ込み、排水しきれなかったため、この時点ですでに地区をひざ下ぐらいまで覆っていたということです。

しかも平日の昼間はもっとも町に人手がいない時間です。稚児清水川の様子を橋の上から監視しながら、やはり危険だとわずかな人手で土嚢をつみはじめたそばから、水がどんどんあふれだしました。そしてみるみるうちに、水は広がり、場所によっては水が胸の辺りまで来るほど水没してしまったそうです。

当日の切迫した状況を佐藤区長（左）と見附消防本部の石黒予防課長（中央）にうかがう

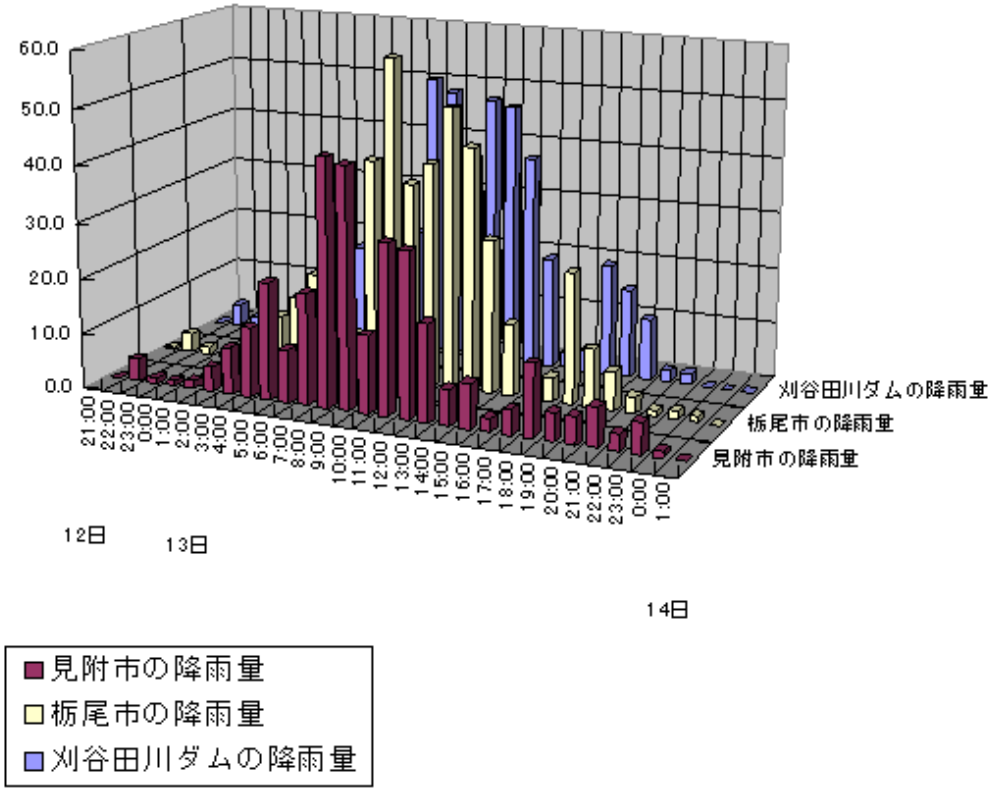
実はこの日の１３：００ごろ、増水した刈谷田川は、隣接した上流の地区で越水してあふれ出し、田んぼを流れていったその水が今度は地区のすぐ西を通って刈谷田川に合流する稚児清水川に流れ込みながら、東岸の堤防を破壊し、稚児清水川の水とともに太田町を襲っていたのです。

事前に予防策を講じていたとしても、災害の規模や地形などによって、予測を超えた災害はいつでも起こりえます。そこで発揮されるのが、地域の「人」の力や信頼関係です。

稚児清水川の破堤箇所（14日・石川県消防本部ヘリ撮影）

写真右上を蛇行する刈谷田川から溢れた水が、田んぼを流れて支流の稚児清水川に流れ込み、大田町近くの東岸の堤防を破った様子。左手の向こうに市街地があり、そこへ向かって一気に水が流れていき、さらに多くの住宅が浸水した。

（引用－見附市消防本部「災害記録写真」）



※見附市の降雨量（見附市消防本部提供のデータから抜粋）
下表―降雨量と刈谷田川水位のデータ、上図―データをもとに降雨量をグラフ化したもの。
ごく短時間に、上流の栃尾市・刈谷田川ダムとともに大量の雨が降ったことがよくわかります。これらの雨水が栃尾市、そしてさらに下流の見附市・中之島町で氾濫しました。

右は稚児清水川、左は川にかかる橋で、この上から地区役員達は川の様子を監視していた

田崎医院付近18メートル道路（13日）
中心市街地が水没している様子
（引用－見附市消防本部「災害記録写真」）

■女性防火クラブ員はこれからも地域のつながりのなかで

佐藤さんによると出水してしばらく後、学校から連絡が入り、当日地区内にある小学校に給食が届

く前に水が出てしまったため、子ども達の給食が用意できないので炊き出しをしてもらえないか、との要請があったそうです。そこで佐藤さんは地区でなにかと地域活動を積極的に取り組んでいる女性に声をかけて依頼をした結果、即座に炊き出しを行ってくれたそうです。

また、後片付けについては、手の足りない家については、ご近所同士で手伝いあって復旧に取り組んだということです。

さらに水害時の様子を、クラブ員のみなさんにもうかがいました。当日は長岡市などへ仕事にでていたため、水浸しのまちに自宅には帰るに帰れない状況で、会社に泊まって翌日帰ってきた人、命がけで山を越えて帰ってきた人など、家族の安否を気遣いながら大変な時間を過ごされたことがわかります。

地区にいたというクラブ員は、お子さんは学校、お連れ合いは会社で、お一人の状態。そこへ学校から、迎えに来るように電話がかかってきて、決死の覚悟で水の中を長靴で歩いていったそうです。

また娘さんが中学生という方によると、一旦帰るように言われた生徒達が、学校を出たところであっという間に腰まで水につかってしまい、結局学校に引き返したとのことです。学校のすぐ横の堤防が越水して一気に水が流れ込んだためでした。

そんな状況下で、地区外にいたクラブ員たちは、子ども達の安否が最大の不安だったので、同居している父母や、親族と連絡を取り合いながら、お迎えに行っていただいたり預かってもらったりして乗り切ったということでした。

そんな経験をしたみなさんからは、やはり災害時には情報が大変重要であるという意見が多く聞かれました。また同居している父母や親族などに本当に助けられたとの意見もたくさん出、人の力、普段からの助け合いの関係などがとても大切であるということを改めてかみ締めあいました。

このように太田地区は、コミュニティや家族の持っている力が潜在的に高いといえるでしょう。消防機関と住民のみなさんとの間に信頼関係が強くあることもわかりました。

しかし、どうしても昼間は若手がいないといった現状などを考えると、今後も地域全体での災害対応力を高めていくことが欠かせません。

今回、若い女性たちによってこのように女性防火クラブ設立に至りました。地域には一陣のさわやかな風が吹いてきたのではないでしょうか。これを力に、さらに地域全体の防災力を、楽しく、お子さんたちも巻き込む形で、高め、広げていっていただければと思います。

▲ このページの上に戻る

目次

1．首都直下地震対策大綱
2．平成17年度消防功労者総務大臣表彰
3．新潟県集中豪雨・中越地震その後　第１回（婦防リーダーマニュアル作成委員　全国地婦連　浅野幸子）
4．宮城県・福島県両連絡協議会会長所属婦人防火クラブ間での交流会について
5．平成17年度婦人防火クラブ連絡協議会幹部地域研修会（中国・四国ブロック）
6．平成17年度自主防災組織リーダー研修会（宮崎県・北海道）
7．安全功労者消防庁長官表彰を受賞して（静岡県女性防火クラブ連絡協議会会長　鈴木政子）
8．住宅用火災警報器の普及啓発に向けて、各地で婦人防火クラブ員研修会を開催
9．平成17年度婦人防火クラブ員救急講習会
10．地方からの便り
11．あなたも危険物取扱者・消防設備士
12．日本防火協会からのお知らせ